

二つの故宮の歴史に現れる政治の思惑

若林 正文

「ふたつの故宮博物院」とは、台北にある「国立故宮博物院」（この場合の「国」とは中華民国。以下著者に従い「台北故宮」と略す）と北京にある「故宮博物院」（同じく「北京故宮」）である。海外旅行好きにとっては「故宮博物館」と言えば永く台北故宮の事であったが、近年北京故宮のほうも収蔵文物が充実してきており、所在する元清朝の皇宮（紫禁城）そのものが世界遺産に指定されたこともあって近年存在感が増しているようである。本書書名に意外感を持った読者もテーマを提示する「序章」の冒頭の三頁ほどを読み進めば、書名の意義はすぐ了解できるに違いない。

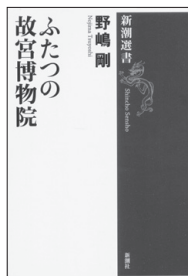
著者は取材の過程で中国美術品や文物について相当の知識をため込んだらしい。とはいえ、本書はふたつの博物館の

収蔵品の芸術的価値を云々したり、そこから両者の収蔵の優劣を語ったりするというものではない。著者は、いわゆる「中華世界」を中心にアジア太平洋地域の政治・外交の動向をおいかけるジャーナリストであり、その言葉によれば『ふたつの故宮博物院』が存在するに至った原因とその後の展開」を「ジャーナリストとして見極める」ことが本書の目的である。

ただ、本書付録の文献目録にも示されているように、「故宮」に関しては類書は少なくない。その中で本書の特色はといえば、豊富（取材のため取ったアポは一〇〇を超える）かつタイムリーな取材による濃厚なアクチュアリティであろう。

第一に、類書の多くでもカバーされている、辛亥革命によって文字通り故宮と

野嶋剛著
ふたつの故宮博物院



四六判 232頁
新潮社 [1260円]

なった紫禁城から宝物が流出する過程から始まって、故宮博物院の成立（一九二五年）から日中戦争、中国内戦を経て故宮文物の中心部分が海を渡って台湾に落ち着き、台北にも故宮博物院が作られるというドラマチックな過程（第二章から第五章）についても、単に文献に基づいて解説するだけという姿勢ではなく、生き残る関係者（いわゆる「老故宮」）への取材による知見などをちりばめて、「複雑な展開をたどり、いまま変化し続けている故宮問題の背後にどのような歴史が横たわり、どのような政治指導者の思惑が潜んでいたのかを解き明かす」という姿勢をとっている。この姿勢に基づいて、文献に関しても、故宮文物の台湾海峡渡

海の、したがって台北故宮誕生の政治的主役である蒋介石の意図を探るため、二〇〇八年七月から米スタンフォード大フーヴァー研究所で公開が始まった、一九四六―五五年分の蒋介石日記を見るために太平洋を渡っている。

だが、残念ながら四八八年秋以降に台湾撤退を決断したと思われる蒋介石の日記には、台湾以後の財政基盤とする黄金を運ぶための苦心惨憺は克明に記されているが、故宮についての言及はほとんど発見できなかったという(第四章)。ただ、一九六五年に開館した台北故宮の建物の設計に関して蔣の意向が強く働いていたことを関係者インタビューを含めた取材で明らかにしている。蒋介石は、コンペで第一位になった設計案が「あまりに中華的でなさすぎる」として退けた。そして一定の経緯の後、元はコンペ審査委員だった中国宮殿建築に詳しい建築家の宮殿様式の設計案が採用されたのだと著者は指摘している(第五章)。

第二に、近年とみに高まっている「国宝回流」の動向をリアルに追っているこ

とである。著者によれば、「いま、中国美術品を最も高い値段で買うのは中国人」と世界のディーラーが口をそろえ、拡大する中国オークション事業の売り手の六割が中国外のコレクターで、買い手の九割が中国人である。この他、一九世紀円明園から英仏軍に略奪されたとされる十二支像をめぐる軍系「保利」グループの活動やサン・ローラン出品の同前ネズミ像を競り落としながら「像は中国のものだから金は払わない」として競売流れをあえて起こした「中華搶救流失海外文物専門基金」の行動の背景なども取材されている。

中国オークション業大手「嘉德」の総裁王雁南が趙紫陽の娘であり、その総裁に著者がインタビューしたのが台北であつたというのが、この「国宝回流」のダイナミズムの存在やあり方を雄弁に物語っているだろう。著者によれば、「中国人の肥大化した愛国意識と、実質的にも経済成長によって大國化した中国の国力が結びついたため、文物返還運動が大きくなるとなりつつある」。そして、

■神奈川大学非文字資料研究センター
2012年度 第1回公開研究会
図像資料が語る近代中国のイメージ

▼6月2日(土)13～17時▼神奈川大学横浜キャンパス1号館804会議室▼参加自由・事前申し込み不要

【趣旨説明】大里浩秋(神奈川大学非文字資料研究センター研究員)

【報告】

・「欧米人によって描かれた19世紀の中国(仮)」ウィリアム・シャング(多摩大学)

・「日本人外交官が収集した中国近代絵画について」呉孟晋(京都国立博物館)

・「戦前期の日本製ポスターに見られる中国イメージ」田島奈都子(姫路市立美術館)

【全体討論及びコメント】モデレーター／大里浩秋(神奈川大学非文字資料研究センター研究員)・孫安石(神奈川大学非文字資料研究センター研究員)

▼主催・神奈川大学非文字資料研究センター▼問合せ先・神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター事務室
横浜市神奈川区六角橋3-27-1

04544815661(内線3532)
FAX 04549110659
http://hinoji.kanagawa-u.ac.jp/
http://www.kanagawa-u.ac.jp/

一〇年カイロで開催された「文化財保護と返還のための国際会議」の背後に中国政府の働きかけがあったことに見られるように、ダイナミズムと緊張は文化をめぐる国際政治にも及んでいる(第六章)。

第三に、民進党陳水扁政権による「故宮改革」の企図とその挫折(第二章)、国民党馬英九政権が改革を反古にしている、ついで北京故宮との交流を開始するプロセス(第七章)を、生の現場を踏んだ取材でカバーしていることである。著者は朝日新聞特派員として台北に二〇〇七年から一〇年まで駐在した。これは、ちようど民進党の陳水扁政権第二期の最終年から〇八年の政権交代を経て国民党馬英九政権による対中政策の大幅な転換が音を立てて進行していた時期にあたり、前記の改革の挫折と両故宮交流開始の過程を観察するに絶好の位置であり、著者はそのチャンス逃さなかった。

民進党政権の改革は、台北故宮を「中華文化の博物館からアジア文化のそれへ」と変革しようとするもので、故宮Ⅱ中華の観念が染みついた国民党側からす

れば、極めてラディカルな変革案であった。民進党は陳水扁を擁して二〇〇〇年劇的な政権交代を果たしたけれども、それは「半分だけの政権交代」(最後まで立法院で過半数を取れず)でしかなかった。民進党の改革は予算審議のボイコットや関連法案改正の否決で葬り去られていった。著者は〇八年馬英九政権成立前後に陳水扁期に院長を経験した二人の学者にインタビューして、改革挫折への無念の情を酷薄なまでに写し取っている。

両故宮交流開始の模様を描いているのが第七章である。ここで本書のアクチュアリティが突出するのは、〇九年両故宮交流の第二弾として北京故宮の院長が台北を訪れ、台北故宮院長と共同記者会見をした場面であろう。これに出席した著者は、常識的な質問が一通り出そろった後、両院長に「故宮統一は成るのか」との質問を発した。この質問が第七章の表題にもなっているが、これへの両院長の返答が、両院交流にかかわる中台の思惑、背景の違いを浮き彫りにしている。これは、本書評読者のためにそのさわりを引

用しておくに値するかもしれない。

北京故宮院長「(ふたつの故宮博物院の)収蔵品はどれも中華民族の文化遺産で、兩岸同胞が共有するものだ。この問題は将来、兩岸同胞によって決めればいい」

台北故宮院長「(台北)故宮の収蔵品はすでに六〇年間も台湾に置かれたきた。多くの同僚たちの努力のもとで収蔵品を守りつづけてきた結果、この台湾という土地にあって、台湾の民衆にとって欠かせない存在に育っている。一方で、文化交流がとても重要なのは言うまでもない」(一九〇頁)

これらの発言は、両院の関係というよりは兩岸(中台)関係を象徴しているかもしれない。ここはそれを云々する場ではないので控えるが、著者はこの引用の後に同様に中台関係を象徴するものとしてコメントしているので読者は楽しみに紐解いていただきたい。

評者は政治史中心の台湾研究者である。戦後台湾史は、もちろん語義の必然

として台湾史の一部分であるが、中国現代史の一部分でもあり、さらにふたつの故宮が誕生し持続していることの国際政治的背景を読めば、アジア太平洋地域におけるアメリカ覇権史の一部分でもある。そのような重層的歴史のダイナミズムの輪郭をふたつの故宮の過去から現在への軌跡から感じ取る、これも、本書の提供するアクチャリティの読み方の一つでもあるように思われる。

ただ、このように読んできて一つ疑問が湧いた。こうした両故宮交流に踏み切った馬英九・国民党にとって台北故宮とはいったい何なのだろうか？ 本書から、蒋介石にとつての、民進党にとつての、さらにはかつての、そして今日の中国共産党にとつての台北故宮の意義は、比較的明確に言葉にされている。では、民主化の果ていったんは政権を失いながら、この間の政治的・社会的変化に順応して再度政権に返り咲いた馬英九・国民党にとつて台北故宮とは何なのだろうか。前引の台北故宮院長の言は一つのヒントではある。だが、長く豊富な現場を

踏んだ著者の一歩踏み込んだコメントがあつてもよかつたのではないかと、望蜀の感を抱く。

ところで、本書を読み進むと、著者が本書を書く必要にとつては過剰なほどの取材をしていることが見て取れるが、そう思っていたら案の定、この書評原稿を書き終わらないうちに次著が出た。『謎の名画・清明上河図』（勉誠出版）である。ここでも著者がこの名画の背景を「脚を存分に使つて」読者に語りかけている。両著ともに取材が豊富なだけに、一見本筋から外れたようなエピソードや著者のちよつとしたコメントの中にも、おもしろさがある。これもまたご一読をおすすめする所以である。

（わかばやしまさひろ 早稲田大学）

■日中対照言語学会

第26回大会（2012年度春季大会）

▼5月27日(日)午前9時20分～午後4時50分
▼高千穂大学（東京杉並区 京王井の頭線西永福駅下車、北へ徒歩10分）▼参加費…一、〇〇〇円（会員・非会員共通）▼入会申込・学会費の納入も受け付けます。（年会費…社会人四、〇〇〇円、院生二、〇〇〇円）

「プログラム」総合司会・竹島毅（大東文化大学「在+空間詞」の「在」に対応する日本語について（洪安瀾・大東文化大学院生）／「ている」と体助詞「着」との対応関係について（梁青月・北京外国語大学院生・大東文化大学院交換留学生）／使役文と受身文の連続性を通して日中両言語の大役を考える（劉志偉・首都大学東京）／中国語の訳文の誤用問題（白愛仙・大東文化大学非常勤）／使役事象タイプと使役交替の可能性（張楠・南山大学院生）／日本語と中国語における状態変化を表す形容詞分について（李慧・筑波大学院生）／判断のモタリテイから見た日中語の類型に関する一提案（王其莉・東北大学）／接辞の機能…「自立化」および「複合阻止」という働き（井川壽子・津田塾大学）／被字句の中の「動詞+その他」について（高橋弥守彦・大東文化大学）